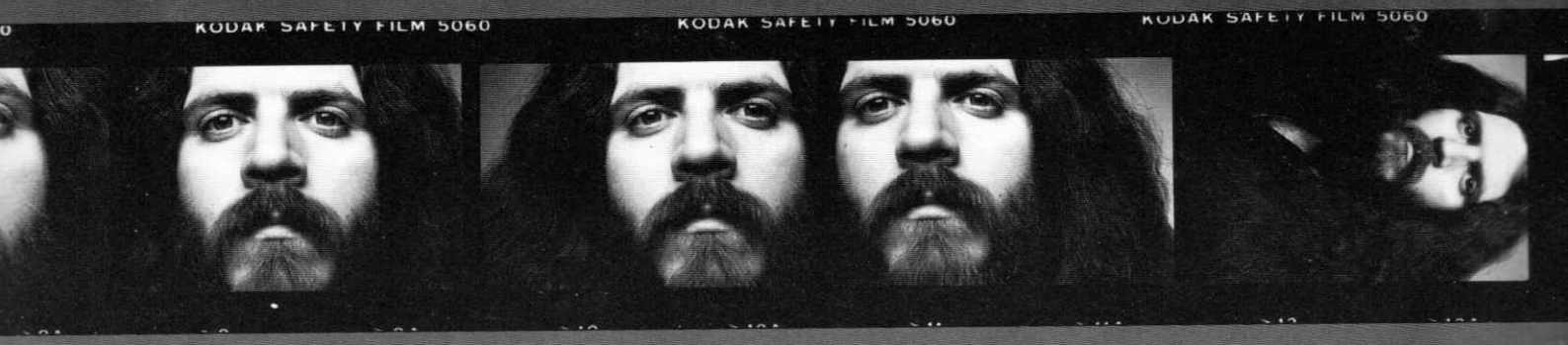
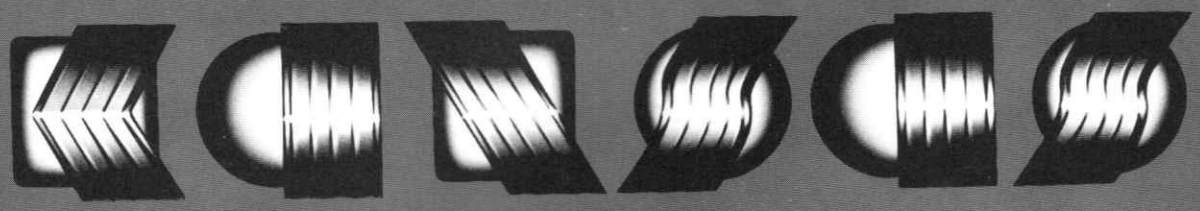
KANSAS





AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1980 ROCKUPATION '80 第1弾

日本公演

1月11日	大　阪	フェスティバルホール	主催■関西テレビ
1月13日	福　岡	九電記念体育館	主催■RKB毎日放送
1月14日	大　阪	フェスティバルホール	主催■関西テレビ
1月15日	名古屋	名古屋市公会堂	主催■中部日本放送
1月16日	東　京	武道館大ホール	主催■文化放送／ウドー音楽事務所

協力■CBS・ソニー
招聘■ウドー音楽事務所
協賛■マックスウェル・ブレンディ

KANSAS MINI B

カンサスは文字通りアメリカのカンサス州で結成された。1970年、カンサスの母体となる同名のバンドが、カンサス州にある田舎町、トペーカにてフィル・イハート、デイヴ・ホープ、ケリー・リヴグレンの3人によって結成されるが、このバンドはその後解散してしまう。そして72年にロンドンに渡ったフィル・イハートが帰国し、自らのバンドを結成するべく、ガラス磨きをしていたスティーヴ・ウォルシュ、当時音楽活動から身を引いていたロビィ・スタインハート、それにデイヴ・ホープ、リッチ・ウイリアムスを誘い作ったのが、5人組のホワイト・クローヴァーというバンドだった。その後ケリー・リヴグレンが参加し、バンドを新たにカンサスと命名、現在のライン・アップが揃い、活動を開始したのである。

彼らは最初に作成したデモ・テープを現在彼らの所属するカーシュナー・レコードの社長、ドン・カーシュナーのもとへ送った。彼はカンサスのサウンドを気に入り、彼らの初期のアルバムを手がけたプロデューサー、ウォーリー・ゴールドを、当時小さなホールでコンサートを行なっていたカンサスのもとへさしむけた。そして、カーシュナー・レコードとの契約が成立したのである。

73年、彼らはニューヨークへ飛び、ウォーリーのプロデュースのもと、初のアルバムのレコーディングにかかった。だが、レコーディングは8週間で終わったにもかかわらず、リリースされるまでには7ヶ月以上もの期間を要し、このデビュー作『カンサス・ファースト・アルバム』は、74年にようやく発表された。

翌75年にはピーター・ロイドの描いたアルバム・ジャケットがグット・デザイン賞を獲得したセカンド・アルバム『ソング・フォー・アメリカ』、同年11月には本邦デビュー・アルバムとして日本に初めて紹介された3作目『仮面劇』を発表。だが、成功とまではいかず、マニアの間で評価された程度だった。2作目は一曲一曲が長すぎAM局でオンエアーされなかったことから、3作目では短かめのナンバーをとり入れる等、アルバム制作の段階で彼らは多くの試みをし、その方向性を決定づけていった。その間精力的なコンサート活動を続けることも忘れなかった。

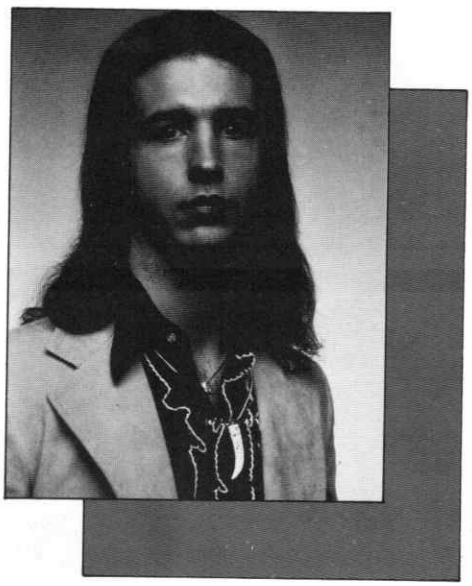
そして、76年には4枚目のアルバム『永遠の序曲』をリリース。このアルバムからシングル・カットされた「伝承」が全米で大ヒットし、初のゴールド・ディスクを獲得、カンサスは一躍ビッグ・ネーム・バンドの仲間入りを果たしたのである。勢いにのった彼らは77年に発表した5作目『暗黒への曳航』も爆発的セールスを上げ、「帰らざる航海」、「すべては風の中に」の2枚のシングルもゴールド・ディスクに輝くなど、この時点でカンサスのロック・シーンにおける地位は、揺るぎないものとなった。

78年には2枚組の超大作ライヴ・アルバム『偉大なる聴衆へ／カンサス・ライヴ』を発表。そのスケールの大きなドラマティック・ライヴの模様を如実に伝えた見事なこのアルバムは、これまでのカンサスの集大成といえる作品であると同時に、ライヴ・バンドとしてのカンサスのすばらしさが実証されたものである。

そして、79年6月に最新作『モノリスの謎』がリリースされ、79年後半いっぱいこのアルバムをメイン・テーマに、〝モノリス・ツアー〟と題うった大々的な全米ツアーを敢行したカンサスは、遂に80年、ここに初の日本上陸を果たしたのである。

Steve Walsh

スティーヴ・ウォルシュ(Vo.Key)

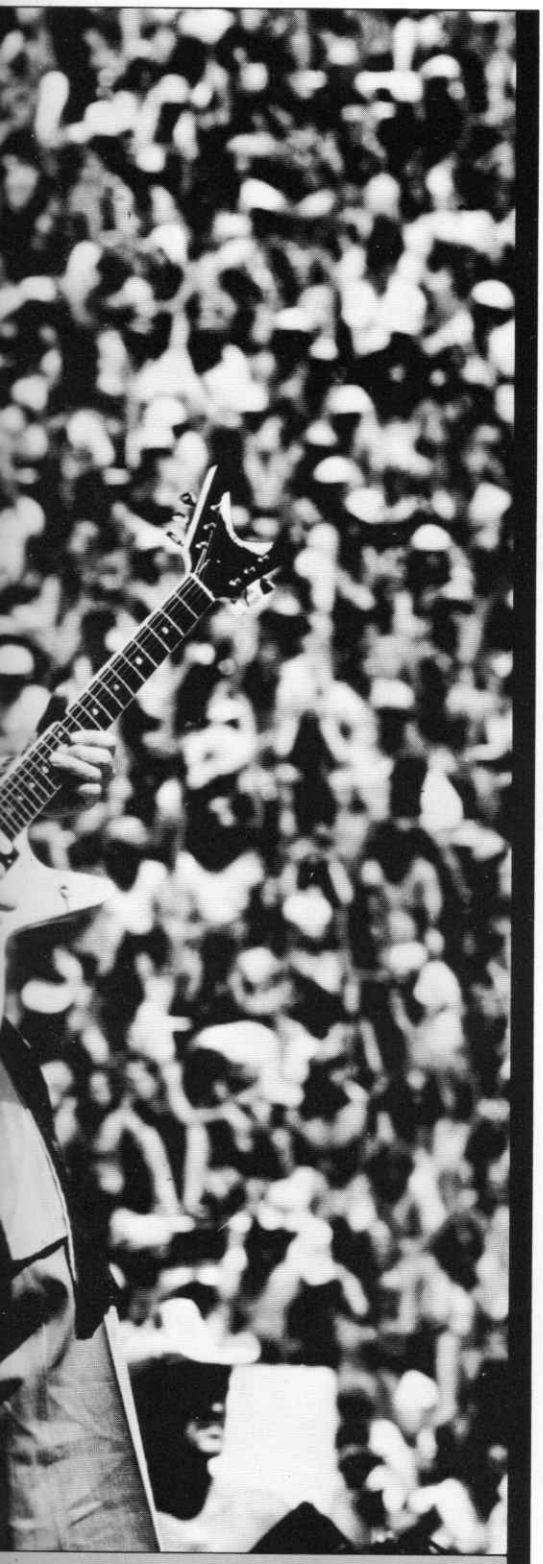


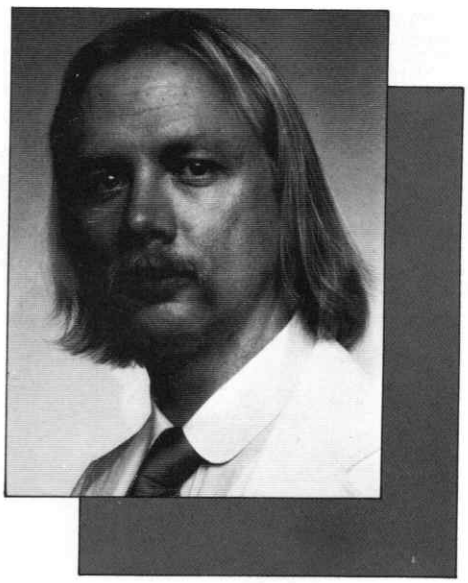
カンサスのエネルギッシュな部分を一手にひきうけるリード・シンガー、キーボード担当。カンサスにおける第2のライターでもある才能あふれる人物。のびのある独特のヴォーカルと、ヨーロッパ音楽、ブリティッシュ・ロックの影響を受けたオルガン・プレイで、カンサス・サウンドに大きく貢献している。ジョギング・スタイルでステージ狭しと飛び回る彼の豪快なアクションは見もの。

●ファンは僕達のすべてを知っている。プレイするのが好きなんだって事も、僕達は普通の人とかわらないって事もね ――――――スティーヴ・ウォルシュ

Kerry Livgren

ケリー・リヴグレン(G,Key)

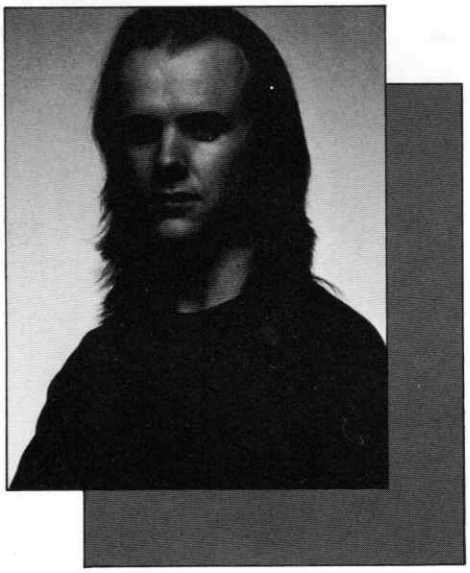


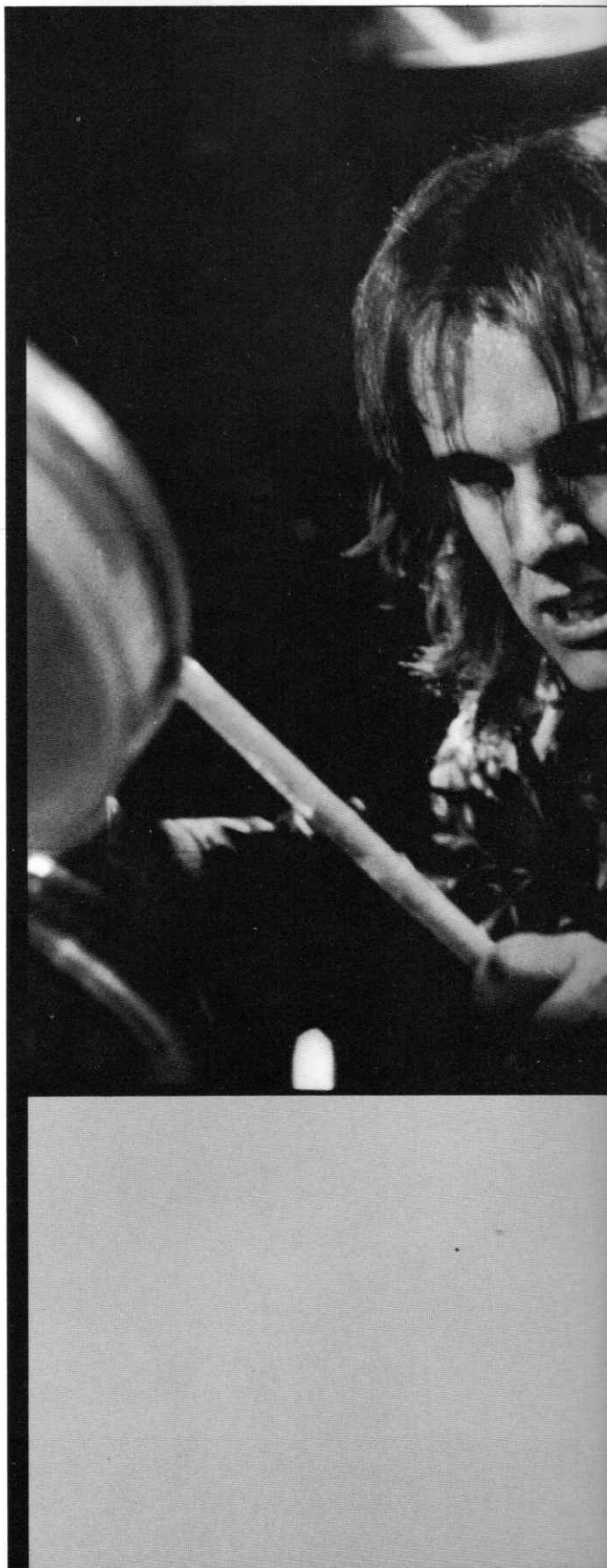


カンサス州、トペーカの〝The Gimlets〟というバンドのリーダーを経て、カンサスに参加。もともとはドラマーだったらしいが、キーボード奏者の父親の教えにより、キーボード・プレイヤーとしても通用する実力を持つ。抜群のギター・テクニックを誇り、コンポーザーとしても活躍。カンサスのほとんどのヒット・ナンバーは彼の作品である。

●中西部っていうのは音楽的なメッカではないし、仲間以外は誰もがついてきてくれない状態で、数年間貧乏も味わった。しかし、そういう時代を通してこそ、飛躍できたと言える――――――――ケリー・リヴグレン

Phil Ehart
フィル・イハート(Ds.Perc)





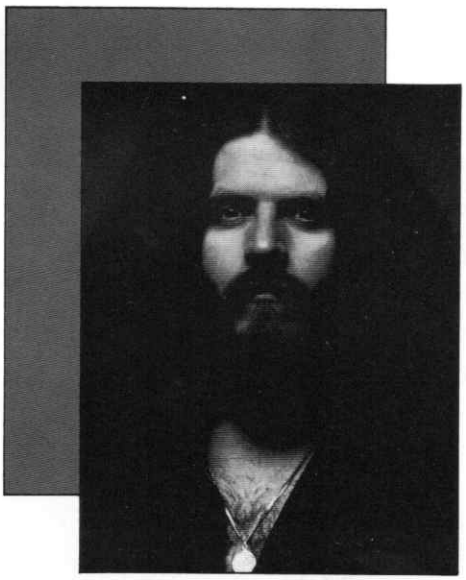
ハイ・スクールを卒業後、空軍に入隊。72年にイギリスで起こったヘヴィ・メタル・サウンドに傾倒してロンドンに渡り、帰国後カンサスの前身バンドを作る。カンサスの結成者といえる人物。ダイナミックでパワフルなドラミングを展開し、スケールの大きいカンサス・サウンドに欠かせない、重要なリズム・セクションだ。

●僕達のグループにはリーダーはいない。ステージの上ではそんな事は関係ないし、誰かが天狗になったら〝うぬぼれんな!〟って回りの皆が言うだろうし、だいいち成功の意味を取り違える人なんていないよ――――

フィル・イハート

Robby Steinhardt

ロビィ・スタインハート(Vo.Vio)

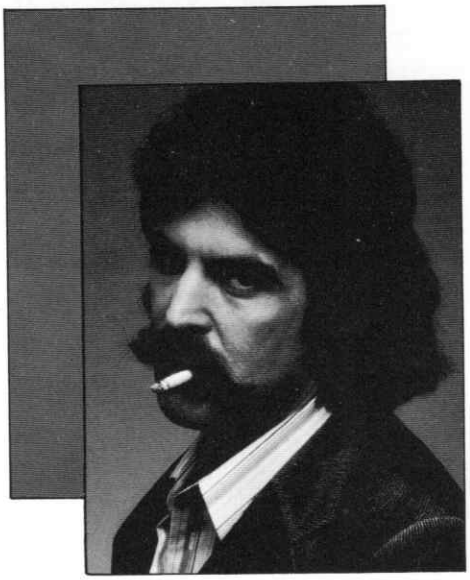


父親のミルトン・スタインハートがクラシックのヴァイオリン奏者であったことから、15年以上も英才教育をうける。カンサス・サウンドの中にあって、ヨーロッパの香り漂よう彼のジプシー・ヴァイオリンはきわめてユニークな存在である。中世風の雰囲気いっぱいにファンタスティックなヴォーカルを聴かせる。

●常に新鮮さと新しい考えを持つ事は重要だ。カンサスがこれからいかに長く存在しても、沈滞という事が問題になる事はないよ。沈滞っていうのは恥ずべき事だね。カンサスは決してそうはならないよ——

ロビィ・スタインハート

Dave Hope
デイヴ・ホープ (B)

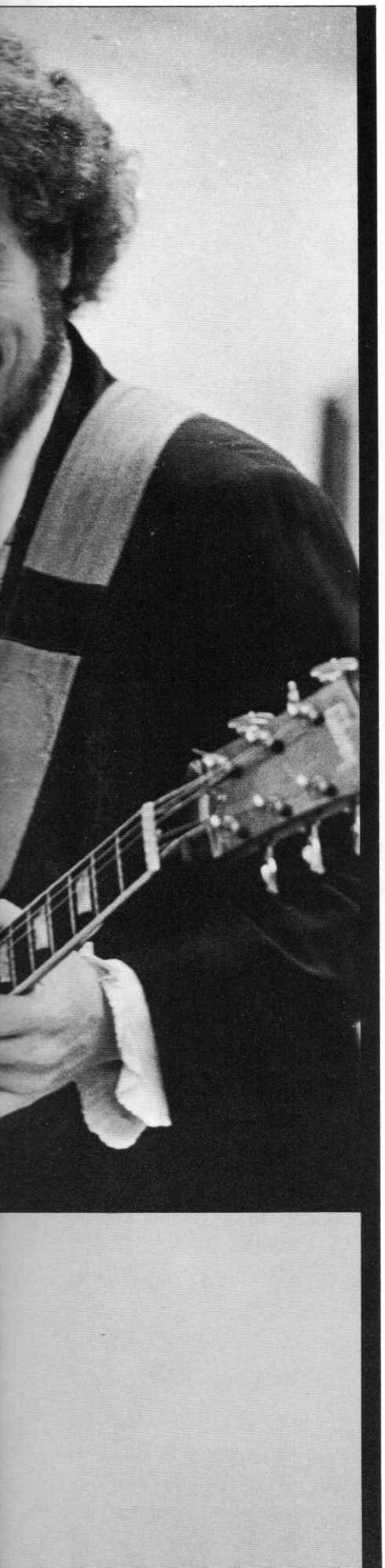


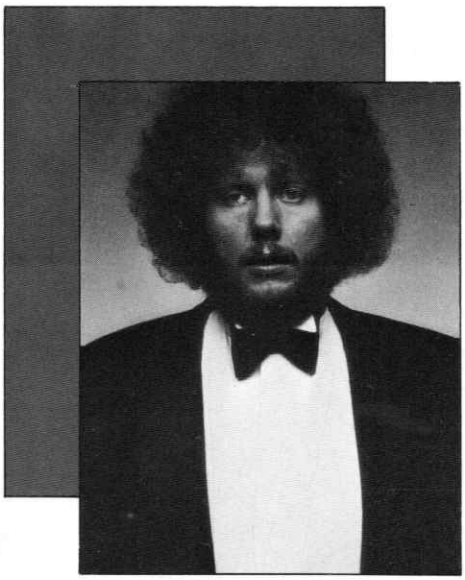
デイヴ・〝スモーキー〟・ホープといわれる程の愛煙家。豊富なキャリアとすぐれたテクニックを誇る、グループにおいては縁の下の力持ち的存在。ヘヴィで厚みのあるブリティッシュ指向の安定したベース・ランニングをみせる。

●僕達の音楽は人にとやかく言えるものじゃない。失敗しても成功しても、僕達自身のものだ。この方針で自分達の目標に向かって一心に仕事をしてきたんだ――

デイヴ・ホープ

Rich Williams
リッチ・ウイリアムス(G)





タキシードがトレード・マークのギタリスト。ステージにおいても決して派手な動きはみせないが、ケリーを巧みにサポートし、二人の絶妙なるツイン・ギターは圧巻。特に彼のアコースティック・ギターは聴きもので、繊細さとロマンあふれるサウンドの立て役者である。

●『永遠の序曲』は本当に時間をかけて作った。お金もなかったけれど、僕達のすべてを注ぎ込んで最善を尽くしたんだ。すばらしい事に僕達の考えと聴衆の考えがぴったり重なったんだ――――――リッチ・ウイリアムス

もっともすぐれたライヴ・バンド、

カンサスをボストンで見た。

カンサスで見たのだったら、さらに良かったのかもしれない。カンサス・イン・カンサスとなって、第一、言葉の響き、語呂がいい。これがニューヨークだったら、カーシュナー・レコードがあり、いうならば、カンサスのフランチャイズで、もっと良かったのかもしれない。いや、カンサスのメンバーたちの多くは、いま、アトランタに住んでいるという話なので、アトランタあたりで見たほうが、条件としては、もっとも理想的だったのかもしれない。

いずれにしても、カンサスをボストンで見た。

ボストンは、ニュー・イングランドの中心都市で、ボストニアンと呼ばれる市民は、控え目で、保守的といわれている。また、教育の中心でもあって、ボストン、ハーバード、マサチューセッツ工科大学など多くの大学が集まっている。そこで、音楽だったら、クラシックや、小理屈ずけられるタイプのものが受けそうに思えるのだが、ロックに関していえば、ファンの態度は、かなり積極的で、客席での反応ぶりも、ワイルドでなんとも荒っぽい。なにしろ、一緒にいった外人さんのほうが、周囲のファンの熱狂ぶりに身の危険を感じたものか、こちらを置き去りにして早々と逃げてしまったのだから。

もっとも、当夜は、ご当地出身の人気バンド、ボストンをはじめ地元のバンドの連中もカンサスを聴きにきているというのでは、超満員の客席が湧くのも当然だったろうが一時間半ほどのカンサスの演奏は正に白熱的で、ファンの興奮をさらにかきたてずにはおかなかった。

カンサスのいまのコンサート・ツアーは、ＬＰ『モノリスの謎』の発表に合わせた、いわゆるプロモーショナル・ツアーである。実をいうと、この『モノリスの謎』の出来栄えが高く評価できなくて、雑誌ジャムのレビューでも、「モノリスなるものをテーマとして選んだものの、〝言葉が容易に浮んでこないが、なんとかしようと思っている〟などという歌詞そのままに、素材の大きさに結局のところ振り回されてしまったというのではなかろうか」などと書いてしまったくらい。

さて、ボストン・ガーデンズのカンサスのショウは、『モノリスの謎』のイメージからつくりだされたに相違ない、不気味な響きをもった声の語りにコーラス、オーケストラ、シンセサイザーを加え合成した交響詩風のプロローグから始まり、やがてカンサスの演奏が入り込み、「謎の沈黙」

であった。

福田一郎／ICHIRO FUKUDA（音楽評論家）

という副題のついた「オン・ジ・アザー・サイド」のイントロダクションが始まったところで、歓迎の拍手喝采、悲鳴まじりの歓呼の嵐。ステージの前の観衆は、早くも総立ちになってしまい、なんにも見えない。仕方なくこちらも椅子の上に立ち上がったのだが、前から十番目ぐらいの良い席で、コンサートが始まったときから立って見る破目になるとは、思ってもみなかった。

かん心のカンサスの演奏だが、実に音がいいし テクニックもしっかりしている。リード・ヴォーカルのスティーヴ・ウォルシュは、たとえていうと、ジャーニーのスティーヴ・ペリーのような、ロック・バンドでいま流行となっている力強い高音域をもっていて、これまで、レコードで耳馴染みとなってきた彼のヴォーカルとは、比べようもなく、迫力があり、魅力的でもあった。魅力的といえば、ロビィ・スタインハートのヴァイオリンもすばらしく、スティーヴのヴォーカルにからみ、さらにはソロをとって、レコードの出来をはかるかに越えて魅力的であった。

「オン・ジ・アザー・サイド」が終り、興奮した聴衆の拍手、歓声を無視するように、アルバム通りに二曲目の「まぼろしの風」に進み、ここでは、ロビィが絶妙のソロをご披露した。たった二曲で、カンサスはボストン・ガーデンズ一万六千人のボストニアンを魅了し、征服してしまったといっていい。

ここで始めて、ロビィがセンターに進み出て、「カンサスのコンサートにようこそ……」と挨拶。客席の興奮度は、すでに上がりっぱなしのところに、「次は前のアルバムからタイトル曲、帰らざる航海」と紹介すると、さらに一層熱っぽく上昇する。奸智ともいえるほど巧妙なプログラミング、演出なのだが、コンサートの初っぱなから、最新ＬＰからの選曲を二曲も押しつけて、観衆の心をがっちりと把握してしまうというのは、自分たちの作品と演奏に、絶対の確信が持てなくては、まず不可能だろう。

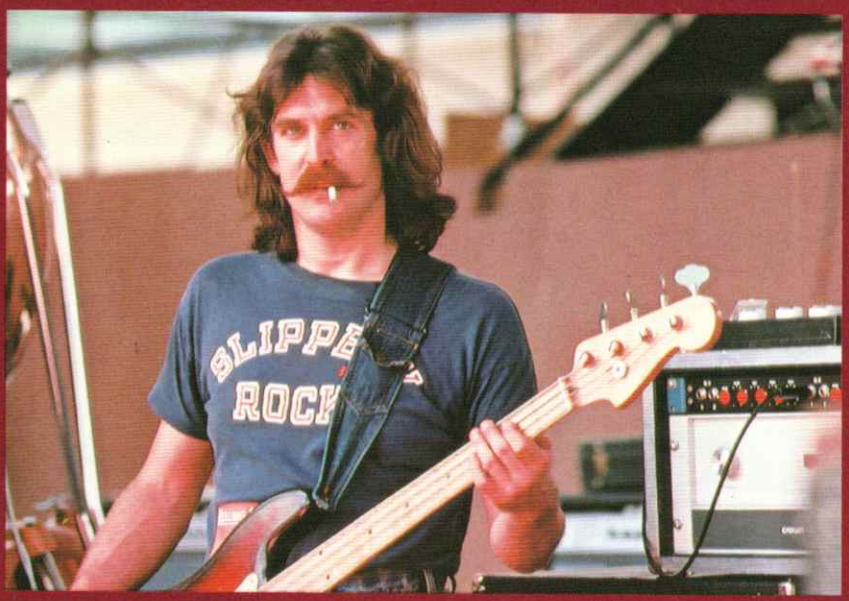
その後、シングルとなった「リーズン・トゥ・ミー」、78年のヒット曲「すべては風の中に」、さらに「堕ちてきた天使」などと演奏を続け、「故郷への追想」で、ひとまず予定のプログラムは終るのだが、それぞれの曲の演奏についてここで触れる心要もあるまい。

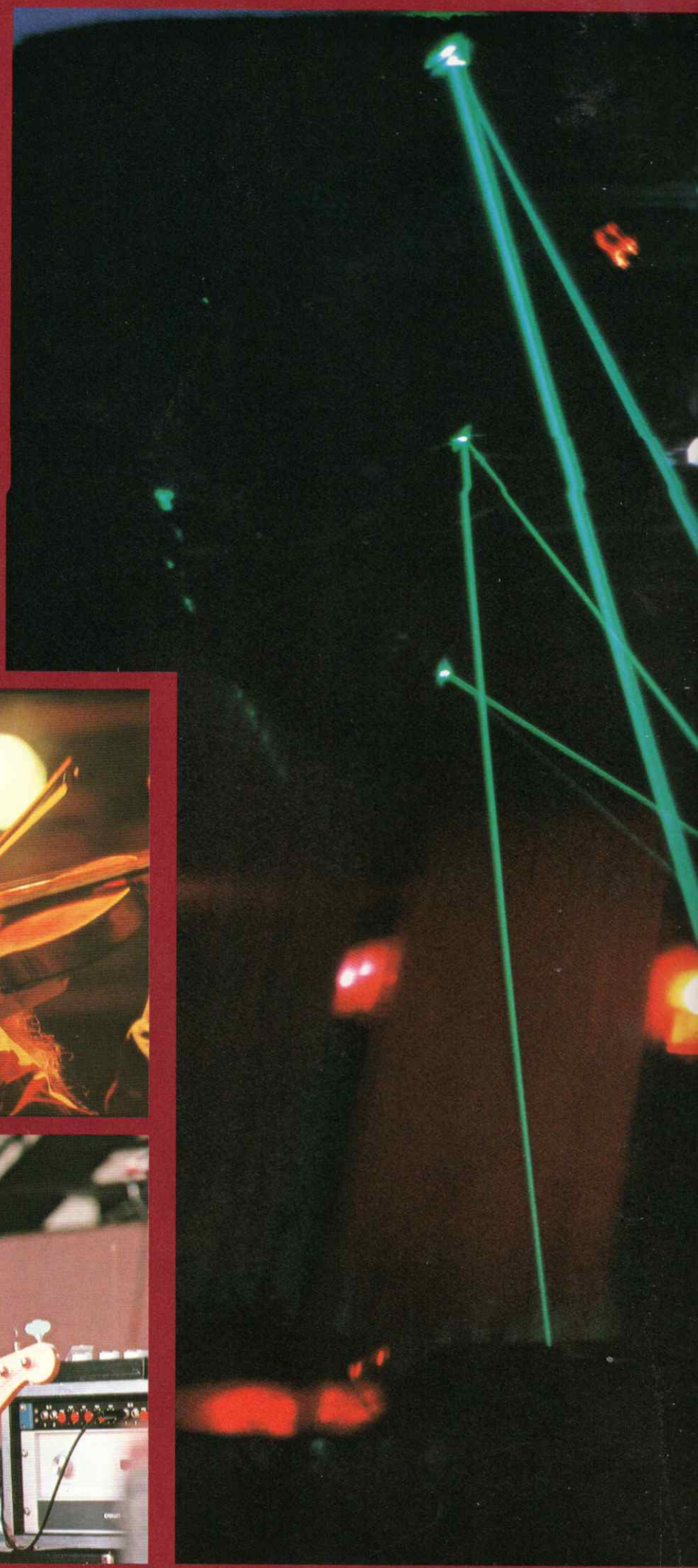
カンサスをボストンで見て痛感したのは、楽屋で、カンサスのメンバーたちにもいったのだが、前もって、よく計画され、よく構成されたプログラムを、よく演奏したということ。しかも、スティーヴとロビィの二人のヴォーカリスト、キーボードとヴァイオリンのソロイストの対照的な使い方、たとえば、二人のステージ上での位置や、ロングヘアーで、動的なケリーと、カーリーヘアーで、タキシード姿の静的なリッチという二人のギタリストのコントラストというように、視覚的な楽しさも十分に計算されているように思われた。

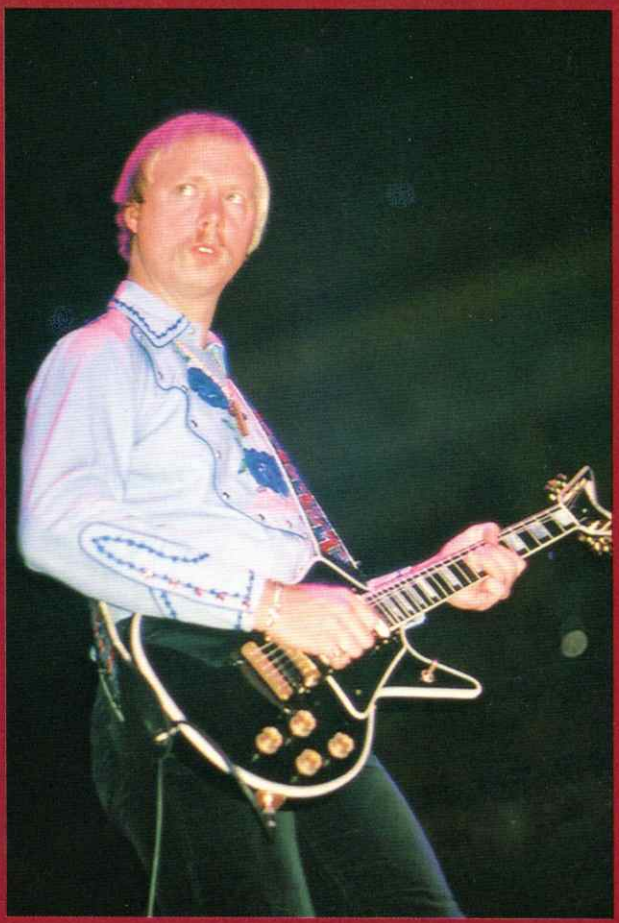
そうしたもののトータルとして得たのは、カンサスは、もっともすぐれたライヴ・バンドであり、カンサスのこれまでのアルバムは、ライヴ・アルバムをも含めて、いずれも、カンサスのもつ魅力を完全には伝えていない、という結論で、それと同時、聴き上手の聴衆の存在がコンサートには絶対に必要であるという重要なファクターも、実感として理解しえた。

カンサスをボストンで見た。

すばらしい体験であった。


SLIPPE
ROCK





カンサスに感じる新しい息吹き。 それはサウンドのドラマである。何かを訴え、

〈モノリス〉とは古代インカ帝国にあった1枚の岩でできた碑のことだという。そんな時代になぜそういうものが存在していたか、一体どんな目的で、だれがどのようにして〝そこ〟に存在させたか、そしてその碑には何が刻まれていたか。やがてその帝国は滅んでしまったけれど、その〈地〉はいまも存在し、その〈碑〉は永久に眠り続けている。そして、その〈血〉を引く人々が現代も生き続けている。

――その伝説の世界にいどんだのがカンサスである。そのタイトルは『モノリスの謎』

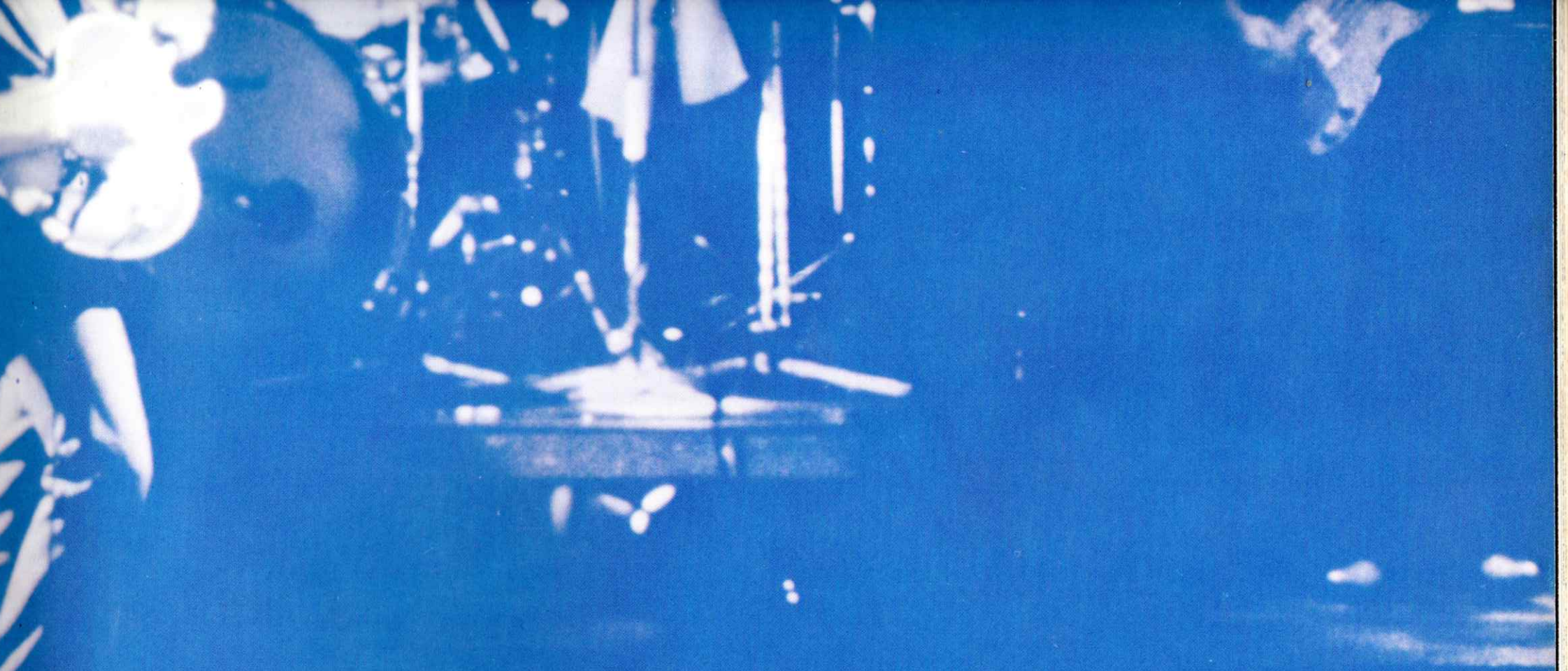
まるで風みたいに
さまよい続ける人々
どこへ行ったのだろうか
もう一度あの人たちに会いたいのに
南の風の国アンデス
その風が、血が僕らを招く
もう一度帰るべきだと……
　かつては自由が満ちあふれ
　平和そのものだった風の国
僕はそこに戻らなくては……
南の風の国の人々が僕を招いている――

テーマとしてはリック・ウェイクマン『地底探険』、アラン・パーソンズ『ピラミッド』などと並ぶものである。大作である。

重厚でドラマティックに、流れるようなサウンドが展開する。ゆったりとハードに、あるいはそれは時にはとてもさわやかに、聴く者の胸に響き亘ってくる。つまり45分間のサウンド・ドラマなのである。

ハードなプログレッシヴ・ロックである。それもほぼ10年前に源を発したブリティッシュの流れを受け継いでいる。いや受け継いでいるのではなく、彼ら自身が新しい息吹きであるとも言えるのだろう。

新しい息吹き。そう、これは絶対に新しい息吹きだ。第一に彼らはイギリスのグループではない。もちろんブリティッシュ・ロックがアメリカン・ロックに影響を与え、このところハードなサウンドが支持され、あるいはニューヨークとロンドンが影響し合ってパンク&ニュー・ウェイヴが展開したことも確かだけれど、プログレッシヴ・ロックにに関する限り、やっぱり大英帝国の国民性の中で育ったと思うし、その香りがカンサスにあっても、アメリカのロッ



語りかけるカンサス。 モノリスは生きている

寺村　敏／BIN TERAMURA

ク・シーンの中ではやっぱりアメリカ人の〈血〉が作り出した新鮮な息吹きだと思うわけだ。

サウンドは基本的には現代（いま）ふうじゃない。ディスコでもテクノ・ポップでもなく、フュージョンでも西海岸でもない。第一にポップじゃない。あえて言えばクラシック音楽なのである。「ア・ウェイ・フロム・ユー」を聴いてみるといい。そして「ステイ・アウト・オブ・トラブル」を。

もちろんクラシック音楽の中に生きている人々から見ると、とてもそうは言えないのだろうが、でもそう感じるのは僕だけではないと思う。

先日、ベルリン室内合奏団のヴァイオリニストとして久々に里帰りした友人がおもしろいことを話してくれた。

――クラシック音楽っていつの時代にも基本的には変わらない評価を受けている。それがジャズやロックにとり入れられても不思議じゃないし、むしろもっともっとその要素の入った音楽が登場するべきだ。そしてそういう時代が来ると思う。

ちなみにその友人はもともとはベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団の第一ヴァイオリン奏者で、「ねえ、スコーピオンズって知ってる？」とたずねると「え？何それ？西ドイツで開かれているジャズ祭なら知ってるけど」と答えた人である。

彼らの世界ではカンサスをとても古典音楽とは見てくれないだろうが、それは僕たちポップス界の人間がそう信じていればいい――というのが現段階で、やがてはという期待感になる。

カンサスの味がほんの少し変わるとボストン、ＥＬＯ、スティクスになる――と感じるのは僕だけだろうか。つまり彼らカンサスがもうひと味、ポップになれば超強力な人気が爆発する要素を持っているということだ。

だが、その要素を加えずにひたすら〈何か〉を追求し続けるカンサス。本来ならば大作ドラマを何時間にわたって演じるであろうカンサス。何かを訴え、語りかけ、人々の心に〈何か〉を呼び起こすカンサス。やはり彼らの存在はドラマである。

●僕達のゴールはロックの名士になる事じゃないし、そのために自分達がかわってしまう事はないんじゃないかな。いずれにしても自分達で買いたくなる様なレコードを作ってみたい　　スティーヴ・ウォルシュ

ロックについて何か書く時に、とても便利な書き出しの言葉がある。「ロックは生きている。ぼくたちの毎日とともに、こいつは常に貌を変え続けている」と。だが、今はまさにその動きがはっきりと見てとれる時期だ。〝バック・トゥ・60S〟を合言葉に60年代ポップスに新しい価値感を見出したニュー・ウェイヴ。そしてこれに引きずられるように、ロックの主流も60年代に向かいつつある。様々なジャンルのロックが、今、この激しい洗礼を浴びている。アメリカン・プログレッシヴの名の元に一つのカテゴリーと考えられる一連のグループも例外ではない。いや、これらは、複雑なサウンド構成を持つだけに、むしろダイレクトにその影響を受けているようだ。フォリナーの新作『ヘッド・ゲームス』、カンサスの『モノリスの謎』とスティーヴ・ウォルシュ初のソロ・アルバム『スキーマー・ドリーマー』は、それを証明するレコードであり、彼ら自身のこれからの道が部分的にせよ示唆された興味深い内容である。

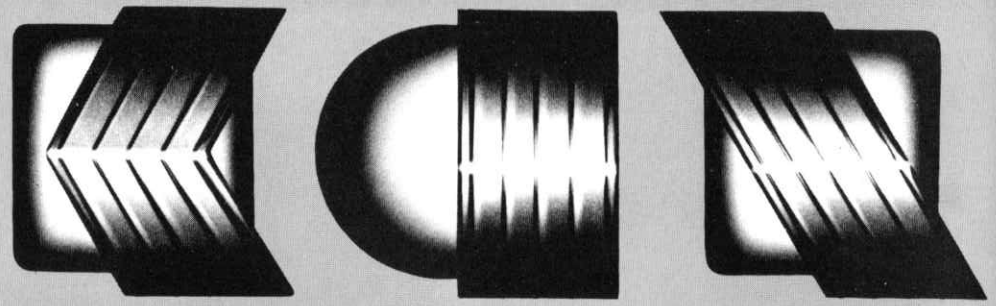
かつてブリティッシュ・プログレは、激しく揺れるロック・シーンの中で、時代に対応すべき何ら新しいサウンドの方法論を持たず崩壊していくだけだった。だが、これはアメリカン・プログレには当てはまらないはずだ。少くともフォリナーやこのカンサスの最近の動向は、アメリカン・プログレのある種のタフな特質を充分物語っているように思える。なぜだろうか？ぼくにはそれは彼ら自身が既に打ち出してきたサウンドの中にあるように思えるのだ。ひとことでいうなら、もう何度もいわれてきたことなのだが、彼らのオリジナリティーが、英米2つのそれぞれ相反する音をバックボーンに持っているということなのだ。カンサスにとってのサウンドの柱は、イエスやジェネシスに代表されるブリティッシュ・プログレの持つ構成美、つきつめればオーケストレーションと、彼らの出身地カンサス州を象徴するような土の匂いが強いハード・ブギ・ロックン・ロール、それにアメリカン・ポップスの3つといえる。こうしたサウンド上の混血こそが、70年代後期に彼らが一つの時代を築き上げた大きなポイントであり、80年代もサバイバーたらんとする〝勁さ〟の証明でもあるのだ。つまりカンサスのようなグループは、基本的なサウンド・コンセプトの変化なしに音をある程度変えることができるわけだ。

カンサスが正式にグループをスタートさせたのは73年のことである。それ以前に彼らはホワイト・クローヴァーと名乗り、本格的な音楽活動を開始していた。更にその母体は、70年にフィル・イハートとケリー・リヴグレンを中心に結成されたグループなのだが、おそらく当時はハード・ブギ・ロックン・ロール主体のサウンドだったのだろう。73年に発表された『カンサス・ファースト・アルバム』と、74年発表の彼らの名を一躍高める契機となった『ソング・フォー・アメリカ』を聴き比べるなら、サザーン・ロック的なそうした要素は明らかに減り、プログレ指向とポップ性とが増えていることで推察できる。それこそがまた、カンサスがビッグ・ネームへ浮上する原因でもあったのだが。

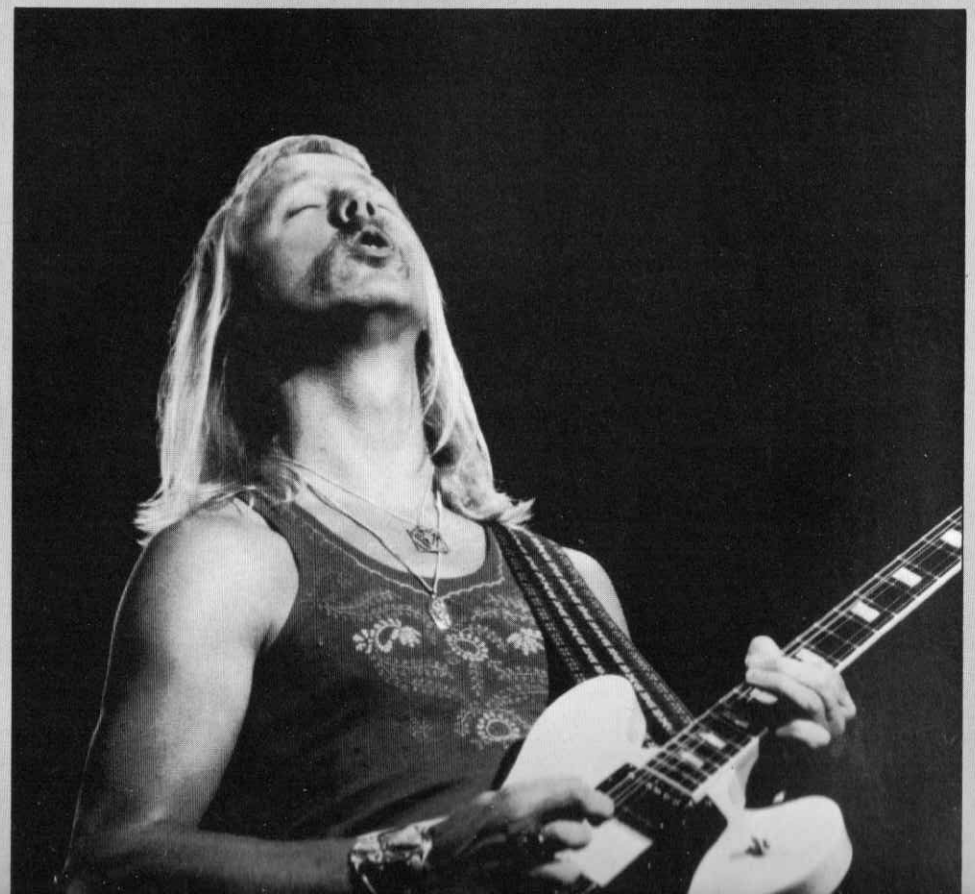
ボストンが『幻想飛行』を携え、アメリカン・ロック・シーンの新しい胎動を伝えたのは76年のことである。その年、スティクスの『クリスタル・ボール』とカンサスの『永遠の序曲』がヒットし、アメリカン・プログレの波は決定的なものとなった。それ以前に、ピンク・フロイドの『狂気』(73年）とクラフトワーク『アウトバーン』(75年)のヒットにより、プログレ不毛の地といわれたアメリカに新しいサウンドが育つ土壌は出来ていた。しかし、アメリカン・プログレがそれらと決定的に違うのは、ヨーロッパ勢のアルバムは〝流すレコード（イージー・リスニング)〟としてもてはやされたのに対し、アメリカン・プログレのアルバムは〝聴くレコード〟としてヒットしたことである。そしてカンサスは、既にその3年前から確固たる信念の元に、新しいサウンドをクリエイトしていた。いくらメンバーがイギリス的な音に惹かれていたとはいえ、未知のものをまとめ上げるのは、決して容易な作業ではなかったはずだ。当時、アメリカ中西部のロック・シーンは地味ながら極めてユニークに動いた。『アウトバーン』も、元は中西部のヒットが全米に波及したものである。数多くのプログレ指向のグループがいた。セントルイスにはパブロフス・ドッグ、クリーヴランドにはドラゴンウィック、シカゴにはスティクス……カンサスはもちろんその代表的グループである。

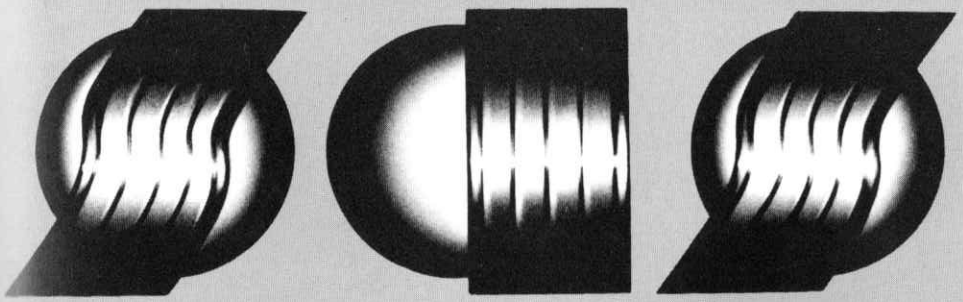
アメリカン・プログレはまた、煮詰まりつつあった当時のロック・シーンを打開する格好の方法論だった。今、80年代を迎え、英米の差は著しく縮まりつつある。特に、モンロー主義の影響でもなかろうが、閉鎖的だったアメリカが胸を大きく広げたからだ。もし、と考えることには何の意味もないかもしれない。しかし、もしカンサスがいなかったら、現在のアメリカン・ロックの開放性はあっただろうか。

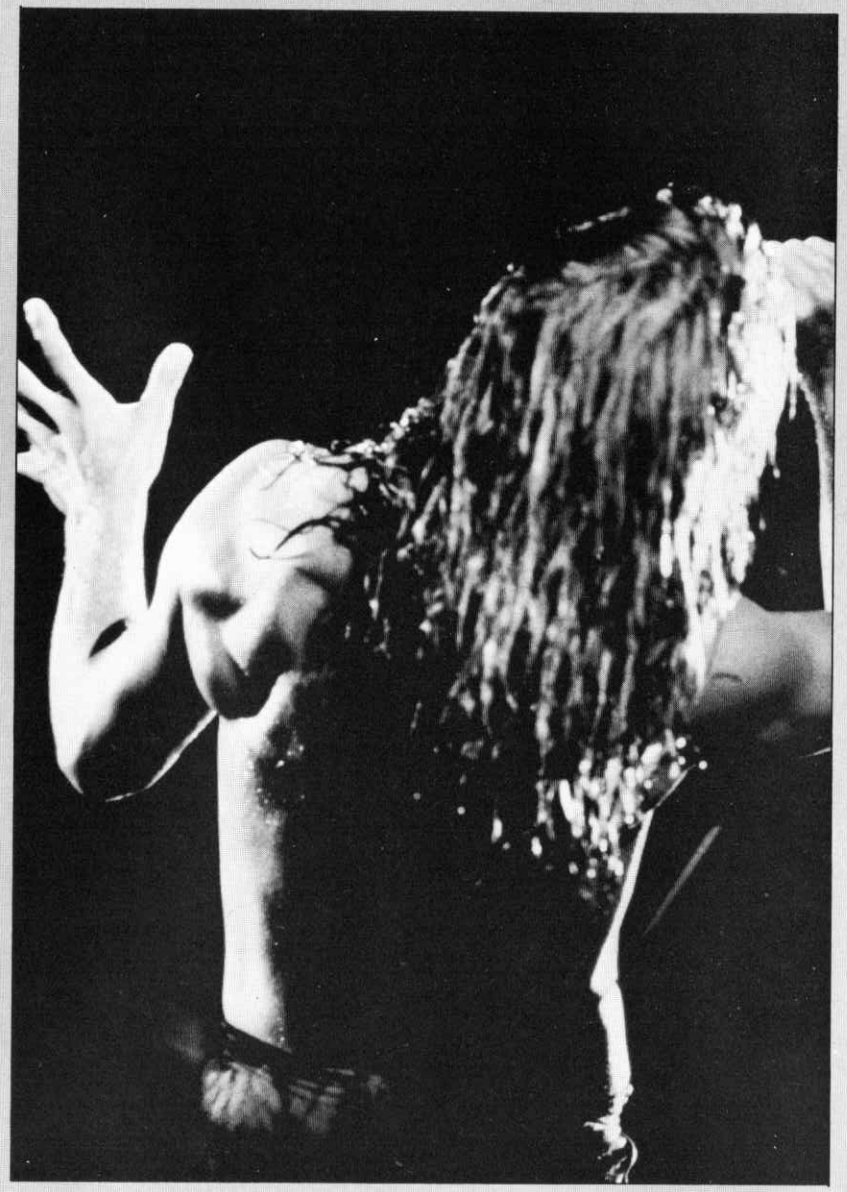
そして76〜78年に、新しい方法論をうち建てたカンサスは、更に80年代をも生きぬくために、今、より新しい〝何か〟を求めている。素晴しいことではないか。



●僕達の音楽をいろいろと評価しようとする人達はいるけど、そんなの僕にとっては関係ないね。良かれ悪しかれ論争はつきものだよ
スティーヴ・ウォルシュ







●聴衆には新しい鼓膜を養おうとしたり、単にレーザーで網膜を焼いたりして欲しくない。ただ〝あなた達はいながらにして俺を違う場所へ連れてってくれた。ぜひ、また見にくるよ！〟って言ってほしいのさ

スティーヴ・ウォルシュ

AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1980
ROCKUPATION'80 第1弾
UDO